

“NIDS NEWS”



防衛研究所企画部企画調整課 (03-3713-5912)

..... 2016年3月の主な出来事

《 『中国安全保障レポート2016』 の公開 》



3月4日、防衛研究所の年次報告書の一つである『中国安全保障レポート2016』を公開しました。本レポートは、同研究所の研究者が独自の視点により、中国の軍事・安全保障について、中長期的な観点から着目すべき事象を分析したものです。そして、中国に対する国内外の関心の高まりに応えることを目的として、平成23年4月に創刊号を発表しました。

第6号となる今回は、サブタイトルを「拡大する人民解放軍の活動範囲とその戦略」とし、地域の安全保障に大きな影響を及ぼしている中国人民解放軍の海軍、空軍、第二砲兵（15年末に「ロケット軍」へ改編）について、それぞれの基本的な戦略と、同戦略の実現に向けた具体的な軍事力増強の動向を検討しています。その上で、人民解放軍が東アジア

の安全保障にもたらすインプリケーションや上記の各軍種の統合的な運用についても分析を行っています。本レポートは、日本国内はもとより、中国を含む国際社会に幅広く情報発信し、それによって中国の政策動向に関する対話や研究交流の拡大に資することを目的としており、日本語版のほか英語版と中国語版も同時に刊行しています。防衛研究所ウェブサイト

(<http://www.nids.go.jp/publication/chinareport/index.html>) において、全文が閲覧可能です。

《 国際安全保障公開セミナーの開催 》

3月7日、防衛研究所は、ホテル椿山荘東京（文京区）において国際安全保障公開セミナー「中国の台頭にどう向き合うか ―日米同盟の新たな課題―」を開催しました。中国は世界第2の経済大国として急速に成長を遂げるとともに、近年では軍事的にも広範かつ急速に台頭する一方、米国はアジア太平洋地域への関与及びプレゼンスの維持・強化を推進しています。本公開セミナーでは、米国の対アジア戦略を多面的に検討し、それを踏



まえて、我が国の安全保障戦略、特に対中戦略や日米同盟の在り方の将来について、内外から有識者をお招きして、活発かつ建設的な議論を行いました。

基調講演では、ジェラルド・カーティス氏（コロンビア大学）が「激動するアジアにおける米国と日本」というテーマで講演しました。第1セッションでは、「米国の対アジア戦略と日米同盟」について、ケント・カルダー氏（ジョンズ・ホプキンス大学高等国際問題研究大学院(SAIS)）、第2セッション「米国の対中戦略」では、ボニー・グレイザー氏（戦略国際問題研究所(CSIS)）、第3セッション「日米同盟の深化と戦略的展望」では、マイケル・オースリン氏（アメリカン・エンタープライズ政策研究所(AEI)）が講演をそれぞれ行い、討論者との討議を行いました。その後、第4セッションでは総括討議及び質疑応答を行いました。各報告者の報告内容については、防衛研究所ウェブサイト（<http://www.nids.go.jp/event/other/seminar/index.html>）をご覧ください。

《 鈴木所長の欧州出張 》

3月15日から22日にかけて、鈴木所長及び吉崎特別研究官（政策シミュレーション担当）は、オランダ王国、ベルギー王国を訪問しました。オランダでは、オランダ国際関係研究所（クリンゲンダール）、ハーグ戦略研究所（HCSS）を訪問し、『中国安全保障レポート2016』に関するブリーフィングや意見交換を通じて、研究ネットワークの拡大を図り、所としての研究・教育に必要な糧を得るとともに防衛交流、情報発信の強化を図りました。ベルギーにおいて、ブリュッセル・フォーラム2016に参加しました。同フォーラムは、閣僚級政治家を始めとする政策当局・実務家、著名な研究機関の長及び研究者が世界各国から集まる場となっており、安全保障の主要な課題に関する最新の情報・知見を吸収するとともに、政策担当者・研究者等との意見交換を行いました。

《 タイ戦略研究センター長の来訪 》

3月16日、チュンポン・チャーイトーイタイ戦略研究センター長（陸軍少将）以下7名が来訪され、大西副所長との懇談、研究者との意見交換を行いました。懇談では、副所長が歓迎の意を述べるとともに、防研の概況について説明したのに対し、センター長からはASEAN各国における防衛シンクタンク及び教育機関間の協力の現状について説明されました。意見交換においては、日本側から「アジア太平洋における多国間安全保障協力」についてブリーフィングを行った後、自由な討議を行いました。



《 『東アジア戦略概観2016』の公開 》

3月25日、防衛研究所の年次刊行物の一つである『東アジア戦略概観 2016』（日本語版）が刊行



されました。『東アジア戦略概観』は、東アジアの戦略環境や安全保障に関する重要な事象についての分析を内外に広く提示し、同地域における戦略環境の理解を深めるとともに、地域諸国との安全保障に関する対話の促進を図ることを目的としています。執筆及び編集は、防衛研究所の研究者によるもので、研究者独自の視点から東アジアの安全保障環境を分析しています。『東アジア戦略概観』は1997（平成9）年以来、毎年刊行されており、今回で第20回目の刊行です。

序章「2015年の東アジア—厳しさを増す戦略環境」では、各章で分析されるさまざまな事象の背景を理解する一助となるべく、東アジアにおける安全保障環境において顕在化しつつあるトレンドについて概観しています。日本、朝鮮半島、中国、東南アジア、ロシア

及び米国の各章に加え、トピック章として、宇宙安全保障及びイスラム過激主義の伸長について分析しています。

『東アジア戦略概観 2016』の日本語版は（株）アーバン・コネクションズから市販されているほか、防衛研究所ウェブサイト（<http://www.nids.go.jp/publication/east-asian/index.html>）においても全文が閲覧可能です。英語版の全文は、5月中に同ウェブサイトでの公開及び市販を予定しています。

《 第63期一般課程 》

3月は、「科学技術と安全保障」、「社会の安全と危機管理」、「近代日本の軍事史」、「日本の防衛」、「サイバーと安全保障」の各講座・准講座及び11個のセミナーを実施しました。さらに川崎勝治株式会社電通パブリックリレーションズ エグゼクティブアドバイザーによる「危機管理におけるメディア対応」、ティモシー・ヒッチンズ駐日イギリス大使による「イギリスの安全保障政策」、河野仁防衛大学校人文社会科学群公共政策学科教授による「統率」及びユスロン・イザ・マヘンドラ駐日インドネシア大使による「インドネシアの安全保障政策」と題した特別講義をそれぞれ実施しました。また、4日に横須賀、8日に新宿・平河町、18日は府中・国分寺において現地研修を実施しました。横須賀では自衛艦隊司令部等において、日本の海上防衛等について研修し、新宿・平河町では東京都庁防災センターで国民保護及び防災への取り組み状況を、また株式会社ラックではサイバー分野に係る最新のインシデントとそれらへの対応等について研修しました。府中・国分寺では日本電気株式会社府中事業場及び株式会社日立製作所中央研究所を研修し、防衛産業の現状や装備品の生産状況について認識を深めました。

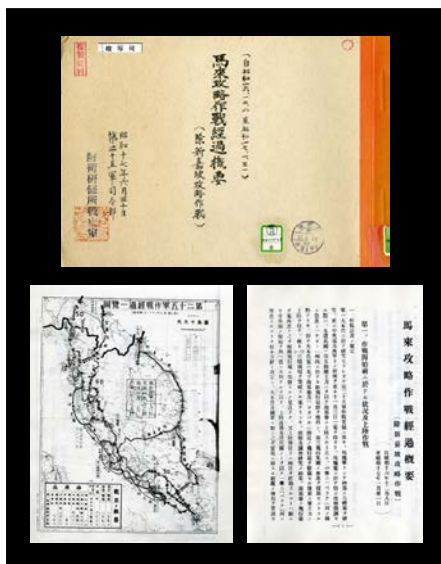
* * *

また、3月29日、アブドラ・ハマド・アル＝バディ学校長補佐を団長とするオマーン国防大学研修団が来訪されました。3月30日、オーストラリア国防大学防衛戦略研究センター（CDSS）学生と63期一般課程研修生との間でテレビ会議を通じた意見交換を行いました。

・・・・・・「史料紹介コーナー」・・・・・・

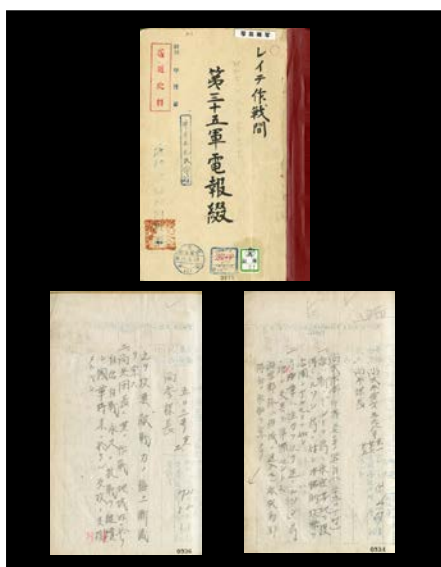
平成28年度も、各都道府県出身の陸海軍将官の中から毎号一人を取り上げて、戦史研究センター史料室が所蔵するその人物などに関連する史料を紹介しています。

《 ^{やました} ^{ともゆき} 山下 奉文 1885~1946年 》
 —高知県出身の陸軍大将—



馬來攻略作戰經過概要 (登録番号：南西-マレー・ジャワ-8)

山下奉文大将は、明治38年11月、陸軍士官学校(18期)を卒業後、軍事調査部長等の要職を経て、昭和16年1月から4か月間、ナチス政権下のドイツへ視察団長として訪問しています。帰国後は、関東防衛軍司令官などを務めたのち、太平洋戦争緒戦には、第25軍司令官としてマレー作戦を指揮します。本作戦は、日本内地、満州、中国などに所在する部隊をまず海南島に集結させ、約2000キロの海上移動を経てマレー半島北端に上陸し、引き続き約1100キロを突破してシンガポールを攻略するというものでした。昭和16年12月8日、マレー半島に強襲上陸した第25軍は、予定の100日よりも早い70日で英国が誇る東洋の牙城シンガポールを攻略しました。この史料は、第25軍司令部が作成した「馬來攻略作戰經過概要」で、本作戦の詳細が記述されています。



第35軍電報綴 (登録番号：比島-防衛-22)

昭和19年10月20日、山下大将が第14方面軍司令官としてフィリピンのルソン島に着任して約2週間後、米陸軍4個師団約10万人がレイテ島に上陸します。急遽レイテ地上決戦を行うことになった第14方面軍は、レイテ島を防衛する第35軍に対して増援部隊を送りますが、そのほとんどが海上輸送中に沈められて戦局は悪化、組織的抵抗は不可能になります。さらに12月15日、米軍がルソン島南のミンドロ島に上陸したため、25日、レイテ作戦は中止になります。同日、山下方面軍司令官は第35軍に対し、方面軍は「主カヲ以テ速カニ『ルソン』島ニ於ケル反撃ヲ準備セントス」、第35軍は「其ノ作戦地域内ニ於テ自活自戦永久ニ抗戦ヲ継続シ国軍将来ニ於ケル反攻ノ支撐タルヘシ」と命令します。この史料は「第35軍電報綴」で、レイテ作戦間の命令や訓示などが綴られています。

《お知らせ》

史料保存のためのマイクロ撮影こともない、一時的に閲覧できない史料があります。

詳しくは、防研ウェブサイト「閲覧が一時不能となる史料」をご覧ください。

※ 記事に関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。なお、記事の無断転載・複製はお断りします。

防衛研究所企画部企画調整課

専用線：8-67-6522、6588 (史料紹介コーナーのみ6668)

外線：03-3713-5912

FAX：03-3713-6149

※ 防衛研究所ウェブサイト：<http://www.nids.go.jp>